

## 春明あれこれ

### 砂吹埋

春明の北端に砂吹埋（すなふきうめ）という地名があり、市営春明住宅（通称・砂吹住宅）が並んでいます。

なぜ砂吹住宅と言われているかということ、ここは木曽川の川原であり、冬の強い風が吹くたびに砂を運んでくる。そして、現在のようにあれだけの高さに埋まったと言われていいます。そのため地名に「埋」という字があるわけです。

私が子どもの頃でも、強い西北の風が吹いてくると砂で畑の作物が埋まってしまうことがよくありました。

### 下奈良城と栖了寺（さいりょうじ）

北本郷という所には下奈良城という城があったらしいです。これは豊臣秀吉が小牧・長久手の合戦の時（1584年）に築いたお城であるといわれ、僅かの間城であったらしい。城といっても平地に築いたものですから、犬山城のような大きな城ではなくごく小さなものであったと思われます。

北本郷という字は現在1番から55番まであって、これが全部堀割の中、つまりお城の跡地の中と言われており、今でも当時の本丸の跡の石垣が少し残っております。

それから、その北本郷の中に昔「さいりょうけん栖了軒」というお寺があって、これは、秀吉の叔父の「せいりょうけん栖了軒せいりょうけん精言浄性居士」という人のために、天正9年（1581）に京都から移ってきて建てられたものであると聞いております。

しかし、栖了軒ではお寺としての資格がないということで、昭和17年に 栖了寺と名前を変更し現在に至っております。

## 春日社の付近

神社のすぐ裏の畑の中に、畳が8畳もひけるといわれるほどの大きな岩があると言われており、余りに大きいので現在まで誰も掘り起こした人がありません。昔は上の方にあったらしいのですが、やはり地盤沈下か何かで、今は1メートルくらい下の方になってしまいました。だからそばに行っても、現在は目で見ることにはできないけれども、埋まっていることは確かです。昭和15年の頃にそのすぐ隣の畑で、それほど大きくはなかったけれども、高さが1メートル50センチくらい、幅が80～90センチくらいの岩があって、それを掘り起こして神社の拝殿の踏み石として使われております。

それから神社の東北約50メートルの所に「首塚」といって、ちょっと盛り上がった塚がありました。これは昔の合戦の時に戦死した人々の埋められた跡かと思われます。今は畑になっており、以前に昔掘り起こした時には古びた刀などが出てきたらしいのですが、全部棄ててしまって今は何も残っていないのが残念です。

その南には「薬師堂」がりましたが、今はそれを取り壊して栖了寺の中に移築されております。

それから神社の南東50メートルくらいの所に、私たちが子どもの頃の昭和30年頃までは、清水がこんこんと湧き出ていて、夏にはみんなが喉を潤して野良仕事をしていたものです。非常に冷たくておいしい水でした。それが昭和30年頃土地改良工事があり、また地下水位がだんだん下がっていったため、今はその面影は全くありません。部落に簡易水道が引けたのもその頃でした。

《出典：「郷土史・わが町春明」 平成19年9月20日発行》

私たち郷土史に関心を持つ者が集まり同好会が発足して間もない平成18年の始め、地域の歴史談義をしていると、「春日社北の畑の地下深くに大きな岩が埋まっている」という話題が持ち上がりました。昔からの言い伝えだということです。

そこでとりあえず町内の人々に尋ねたところ、一様に「お宮さんの裏辺りに相当大きな岩が埋まっていることは以前から聞いているが、これまで誰も掘ってみた人はいない。その岩は果たしてどれ位大きいのか、いつ頃から埋まっているのか、なぜそこに埋まっているのかなどは謎である」との答えでした。中には、「江戸時代に何かの事情で埋蔵金を埋めそれを隠すために大岩がかぶせてあると聞いている」と話す人もいました。

これほど広範に伝わっているのなら伝説と考えても良いのだろうかと対応を思案していたところ、近郷の郷土史家から「巨岩が埋まっているという伝説を耳にしたが、もう調べたのか？まだなら手伝いたい」と督促されました。

「これはおらが村の中のこと。我々メンバーだけで調査して結論を出し、我が会の存在価値を発揮したい」と意気込み、追い立てられるように発掘計画を立て、万が一学術的に貴重な物が出ないとも限らないので博物館にも連絡を取り立ち会いをお願いしました。更には、町内在住で一宮市文化財審議委員であった長谷川公茂先生にも現場での助言をお願いするなど、あらゆる事態を想定して当日に備えました。

冬晴れの当日、朝から掘削作業は順調に進み、地表から2メートルほど掘り進めたところでその岩が姿を現しました。全員固唾を飲んで注視する中、鑑定が始まり、その作業は数十分で終わり結果が発表されました。

**判定結論** 一宮市博物館 土本典夫学芸員（現博物館長）

『表面に文字や絵などの加工痕がないので自然石と思われる。数百年前、木曾川の流路が定まっていなかった頃、流されてきて留まったものだろう。』

弥生時代の土器も出ず、期待していた春日社にまつわる埋蔵物も出ず、しかも岩の大きさは予想していたような巨大なものではなかったのです。

たかが岩、されど私たちには村の伝説の\*大岩 評価はどうあれ、永く語り継がれた伝説の調査をすべく地主さんの許可を取り付け、開堀業者を手配して掘り出し専門家による判定を得ることができたことが成果なのだ とひとり妙に納得しながら一日の作業を終えたのでした。

\*永く人々のロマンを誘い皆の手で掘り起こされたこの岩は現在、北本郷にある栖了寺の境内参道脇に鎮座している。

### 栖了寺（元薬師堂）補足記事

熊澤 良嗣 調

初め薬師堂と称していた。明治9年官命により廃庵の危機に陥ったため、当時の霊願庵主が壇王<sup>だんのう</sup>法林寺（京都市左京区川端三条上）に請願し、助力を得て同寺の境外仏堂として存続が認められた。

更に明治38年、鳴虎<sup>なみとら</sup>報恩寺（京都市上京区小川町寺之内下射場）にあった塔頭「栖了軒」を移転併合した。栖了軒は豊臣秀吉が叔父の栖了軒清譽浄性居士の菩提を弔うために天正9年に建てた巨刹だが、明治維新以降に存続が困難になっていたという。

なお、報恩寺には「瀬部の阿部さま」で紹介した阿部家の祖先、阿部正勝の墓碑があることにも注目したい。

（一宮市史西成編などを参照）

本追加情報シリーズ「009 春明について」（村に伝わる伝説）もご覧ください。